

いまひとふくおか

プロだから薬害と闘う

血液製剤を投与されてC型肝炎に感染した患者らが国や製薬会社に賠償を求めた薬害C型肝炎九州訴訟を、薬剤師の立場で提訴前から支えてきた。今年12日、大阪高裁に続き、福岡高裁でも和解を進める意向が示された。

人生をかけてきた原告たちの力のおかげ」と目を細めた。

東京、大阪両地裁で初の集団提訴があった直後の02年10月、弁護士が主催した電話相談会に参加したのが、本格的に支援活動を始めのきっかけとなった。

その日は午前9時から午後4時半まで、弁護士事務所5回線ほど引いた電話が鳴りやまなかった。受話器を上げると、「出産の際に」「手術で」と、相談者はみな明確に被害を訴え出した。今も忘れられない声がある。「C型肝炎だから薬害と闘う。病気への乏しい理解が1人の人生を閉ざす。支援活動は多岐にわたるが、最も力を入れていくのが医療従事者を対象に薬害肝炎問題の実情を伝えることだ。学習会な

原告を含めた患者全員への恒久対策を求める原告と、全員の救済に難色を示しているとされる国との溝は依然深いままだが、猿渡さんは「提訴から間もないころには、想像もできなかった段階。実名を公表するなどして

C型肝炎訴訟を支える薬剤師

猿渡

圭一郎さん (45)



「原告を支えるため、やれることはすべてやりたい」と話す猿渡さん。大牟田市で

加害側になる怖さ胸に

どの場に原告を連れ、被害の実情を語ってもらい。これまでに県内の医療機関で数十回、重ねてきた。もちろん福岡地裁で開かれる裁判にはほぼ毎回、足を運ぶ。裁判後の支援者集会では、司会役としてマイクを握る。

学生時代は、働く人たちの健康問題に関心をもち、とりわけ、押し花電報の製造工場で従業員が花粉症に苦しんだ事例の研究に打ち込んだ。薬剤師の資格を取った後の89年、大牟田市の病院に就職。98年4月には、薬害エイズ事件を教訓に発足した医療品監視機関「薬害オンブズパス」の福岡支部の立ち上げにも加わった。国が有効性を否定した薬を購入した自治体に、購入代金の返還を求めさせる住民監査請求をするなど、医療の現状から薬害の問題性を発

薬害問題への取り組みに力を入れるのは、「いつ自分が薬害の片棒をかついてもおかしくない」との危機感もある。サリドマイド、スモン、エイズと繰り返されてきた薬害問題の根底には、国と製薬会社の密接な関係が指摘される。「薬の安全性についての確認がおろそかになる恐れがある構造的な問題が改められない以上、薬害はなくならない」と訴える。

だからこそ、薬害肝炎問題については、なぜ問題が起きたのか徹底的に議論し、根絶策を確立しなければならぬと強調する。「薬を利用する市民が薬害を自分たちの問題としてとらえることも根絶への近道。専門家を分けていくことも欠かす示していかないと」(山本亮介)